

審査意見への対応を記載した書類 別添資料目次

- 別添資料 1-1 生産環境経営学部生産環境経営学科 カリキュラム・マップ（新旧）
- 別添資料 1-2 農林大学校（養成部・研究部） カリキュラム・マップ
- 別添資料 1-3 生産科学科 カリキュラム・マップ
- 別添資料 3-1 食料・農業・農村基本法の骨子
- 別添資料 3-2 静岡県農業農村整備みらいプラン 2018-2021
- 別添資料 3-3 農山村地域の環境について学ぶ科目の概要
- 別添資料 4 履修モデル
- 別添資料 6 教育課程の概要
- 別添資料 7 各コースにおける履修方法
- 別添資料 8 単位数・科目数の見直し状況
- 別添資料 9 先端技術について学ぶ科目の概要
- 別添資料 13 臨地実務実習要綱
- 別添資料 14-1 企業実習巡回指導計画
- 別添資料 14-2 経営実習Ⅰ巡回指導計画
- 別添資料 14-3 経営実習Ⅱ巡回指導計画
- 別添資料 14-4 教員時間割
- 別添資料 16-1 C棟レイアウト図
- 別添資料 16-2 校地校舎の図面（新）
- 別添資料 16-3 校地校舎の図面（旧）
- 別添資料 17 専門図書リスト
- 別添資料 18 附属施設・県有施設の概要
- 別添資料 20-1～14 シラバス修正（新旧）
- 別添資料 20-15 学則別表（新旧）
- 別添資料 20-16 校舎の利用計画表（新旧）
- 別添資料 20-17 時間割表（新旧）

生産環境経営学部生産環境経営学科 カリキュラム・マップ

卒業単位:129単位

【養成する人材像】
 ○農林業経営体の中核を担う人材であるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育てていくことができる人材

●必修
 ◎コース必修
 ○選択必修
 ■実験・実習

科目	カリキュラム・ポリシー	教育課程							
		1年		2年		3年		4年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
基礎 (20単位)	(1)一般教養やコミュニケーションスキルなどを学ぶ教育課程を編成する。	■一般教養(10~12単位)		■一般教養(10~12単位)		■一般教養(10~12単位)		■一般教養(10~12単位)	
		●経済学概論 2 ●情報処理基礎 1 ●法学概論 2 ●社会学概論 2 ●政治学概論 2 ●統計学 2 ※ここから4単位以上		●情報処理応用 1 ●歴史学概論 2 ●文学概論 2 ●文明論 2		●茶道 2 ●華道 2			
職業専門 (85単位)	(2)企業的な経営管理や経営戦略、加工・販売の手法や流通の仕組みなどを学ぶ教育課程を編成する。 (3)農林業に関する基礎的な知識及び農林業生産に関する基礎的な理論や技術を学ぶ教育課程を編成する。 (4)農林業の経営や生産に活用される先端技術を学ぶ教育課程を編成する。 (5)農山村の自然環境や景観の保全に配慮した農林業生産を学ぶ教育課程を編成する。	■コミュニケーションスキル(8~10単位)		■コミュニケーションスキル(8~10単位)		■コミュニケーションスキル(8~10単位)		■コミュニケーションスキル(8~10単位)	
		●コミュニケーション論 2 ●英語I 2 ●英語II 2 ●保健体育I 2 ※ここから4単位以上		●英語III 2 ●英語IV 2 ●保健体育II 2					
展開 (20単位)	(6)農山村の伝統・文化の継承や地域社会について学ぶとともに、農山村の地域資源を農林業経営に活用する手法を学ぶ教育課程を編成する。	■経営管理(25単位)		■経営管理(25単位)		■経営管理(25単位)		■経営管理(25単位)	
		(自由)簿記基礎 2 ●農林業経営学(自由)簿記応用 2 ●フードシステム論 2 ※ここから4単位		●経営戦略 2 ●財務会計 2 ●マーケティング論 2 ●労務管理 2 ●法と農林業経営 2 ●経営管理論 2		●管理会計 1 ●農と食の起業論 2 ●知的財産権 2 ●農林業の経営組織論 2 ●人材マネジメント 2		●経営実習I 5 ●経営実習II 5	
総合 (4単位)	(7)農林業経営における課題の解決に向けた研究の手法などを学ぶ教育課程を編成する。	■加工・流通・販売(栽培・畜産:8単位、林業:6単位)		■加工・流通・販売(栽培・畜産:8単位、林業:6単位)		■加工・流通・販売(栽培・畜産:8単位、林業:6単位)		■加工・流通・販売(栽培・畜産:8単位、林業:6単位)	
		●農学概論 2 ●環境と農林業 2 ●県内農林業事情 2 ●農林業史 2 ●分子生物学 2 ※ここから4単位 (自由)農林業のための生物学 (自由)農林業のための基礎数学 (自由)農林業のための化学		●技術者倫理 2 ●海外農林業事情 1 ●野生鳥獣管理・利用論 2					
ディプロマ・ポリシー	(1)専門分野のみにとらわれない幅広い知識やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養を有している。 (2)農林業経営体の大規模化や経営の多角化に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識を有している。 (3)農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識を有している。 (4)農山村の地域社会における将来のリーダーとして、農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくための農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などに関する知識を有している。 (5)農山村の地域資源を活用することにより、農林業経営における新たな事業展開を生み出すための手法を理解している。 (6)修得した専門知識と技術を駆使して農林業経営における課題を探索し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、分析・整理した結果を表現できる能力を有している。	■農林業基礎(10単位)		■農林業基礎(10単位)		■農林業基礎(10単位)		■農林業基礎(10単位)	
		●農学概論 2 ●環境と農林業 2 ●県内農林業事情 2 ●農林業史 2 ●分子生物学 2 ※ここから4単位 (自由)農林業のための生物学 (自由)農林業のための基礎数学 (自由)農林業のための化学		●技術者倫理 2 ●海外農林業事情 1 ●野生鳥獣管理・利用論 2					
ディプロマ・ポリシー	(1)専門分野のみにとらわれない幅広い知識やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養を有している。 (2)農林業経営体の大規模化や経営の多角化に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識を有している。 (3)農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識を有している。 (4)農山村の地域社会における将来のリーダーとして、農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくための農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などに関する知識を有している。 (5)農山村の地域資源を活用することにより、農林業経営における新たな事業展開を生み出すための手法を理解している。 (6)修得した専門知識と技術を駆使して農林業経営における課題を探索し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、分析・整理した結果を表現できる能力を有している。	■生産理論(16単位)		■生産理論(16単位)		■生産理論(16単位)		■生産理論(16単位)	
		●農学概論 2 ●環境と農林業 2 ●県内農林業事情 2 ●農林業史 2 ●分子生物学 2 ※ここから4単位 (自由)農林業のための生物学 (自由)農林業のための基礎数学 (自由)農林業のための化学		●技術者倫理 2 ●海外農林業事情 1 ●野生鳥獣管理・利用論 2					
ディプロマ・ポリシー	(1)専門分野のみにとらわれない幅広い知識やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養を有している。 (2)農林業経営体の大規模化や経営の多角化に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識を有している。 (3)農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識を有している。 (4)農山村の地域社会における将来のリーダーとして、農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくための農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などに関する知識を有している。 (5)農山村の地域資源を活用することにより、農林業経営における新たな事業展開を生み出すための手法を理解している。 (6)修得した専門知識と技術を駆使して農林業経営における課題を探索し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、分析・整理した結果を表現できる能力を有している。	■生産技術(栽培・畜産:26単位、林業:28単位)		■生産技術(栽培・畜産:26単位、林業:28単位)		■生産技術(栽培・畜産:26単位、林業:28単位)		■生産技術(栽培・畜産:26単位、林業:28単位)	
		●農学概論 2 ●環境と農林業 2 ●県内農林業事情 2 ●農林業史 2 ●分子生物学 2 ※ここから4単位 (自由)農林業のための生物学 (自由)農林業のための基礎数学 (自由)農林業のための化学		●技術者倫理 2 ●海外農林業事情 1 ●野生鳥獣管理・利用論 2					
ディプロマ・ポリシー	(1)専門分野のみにとらわれない幅広い知識やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養を有している。 (2)農林業経営体の大規模化や経営の多角化に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識を有している。 (3)農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識を有している。 (4)農山村の地域社会における将来のリーダーとして、農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくための農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などに関する知識を有している。 (5)農山村の地域資源を活用することにより、農林業経営における新たな事業展開を生み出すための手法を理解している。 (6)修得した専門知識と技術を駆使して農林業経営における課題を探索し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、分析・整理した結果を表現できる能力を有している。	■農山村の伝統・文化及び地域社会(20単位)		■農山村の伝統・文化及び地域社会(20単位)		■農山村の伝統・文化及び地域社会(20単位)		■農山村の伝統・文化及び地域社会(20単位)	
		●農学概論 2 ●環境と農林業 2 ●県内農林業事情 2 ●農林業史 2 ●分子生物学 2 ※ここから4単位 (自由)農林業のための生物学 (自由)農林業のための基礎数学 (自由)農林業のための化学		●技術者倫理 2 ●海外農林業事情 1 ●野生鳥獣管理・利用論 2					
ディプロマ・ポリシー	(1)専門分野のみにとらわれない幅広い知識やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養を有している。 (2)農林業経営体の大規模化や経営の多角化に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識を有している。 (3)農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識を有している。 (4)農山村の地域社会における将来のリーダーとして、農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくための農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などに関する知識を有している。 (5)農山村の地域資源を活用することにより、農林業経営における新たな事業展開を生み出すための手法を理解している。 (6)修得した専門知識と技術を駆使して農林業経営における課題を探索し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、分析・整理した結果を表現できる能力を有している。	■総合(4単位)		■総合(4単位)		■総合(4単位)		■総合(4単位)	
		●農学概論 2 ●環境と農林業 2 ●県内農林業事情 2 ●農林業史 2 ●分子生物学 2 ※ここから4単位 (自由)農林業のための生物学 (自由)農林業のための基礎数学 (自由)農林業のための化学		●技術者倫理 2 ●海外農林業事情 1 ●野生鳥獣管理・利用論 2					

農林環境専門職大学 生産環境経営学部 生産環境経営学科 カリキュラム・マップ

育成する人材像	基礎的な生産能力に加え、経営体の経営革新を推進する、加工・流通・販売への応用力や経営管理能力、先端技術への対応力を有した人材
	農林業を営みながら、地域社会における未来のリーダーとして、自然と共生し、美しい農山村の景観や環境を磨き上げるとともに、幅広い教養と豊かな人間性を備え地域の文化伝統を守っていくことのできる人材

ディプロマ・ポリシー	区分	1年		2年		3年		4年		科目
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
1 ・専門分野のみにとらわれない幅広い知識 ・価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養	一般教養 コミュニケーション	静岡学		歴史学概論	文学概論	茶道				基礎
		経済学概論	社会学概論		文明論	華道				
農林業生産を行うための基礎的な知識・技術と、それを活用するための能力、先端技術への対応力	農林業基礎 栽培 生産理論 林業 畜産	農学概論	農林業政策		技術者倫理					職業専門
		農林業史	農林業史							
農林業経営を行うための加工・流通・販売の知識や経営管理能力	経営管理 加工・販売・流通	農と食の経済学	法と農業経営	農林業経営学	経営戦略Ⅰ	経営戦略Ⅱ	農と食の起業論			職業専門
		簿記基礎	簿記応用	財務会計	マーケティング論	人材マネジメント	知的財産権			
農林業生産及び経営の実験・実習・演習を通じて身に付く、自主的・継続的に学習を進める能力、他者と協調し事業を推進できる能力	生産技術 栽培 林業 畜産 共通 加工・販売	総合実習	圃場実習(栽培)	生産マネジメント実習Ⅰ(栽培)	生産マネジメント実習Ⅱ(栽培)					展開科目
			演習林実習	生産マネジメント実習Ⅰ(林業)	生産マネジメント実習Ⅱ(林業)	森林施業プラン演習	林業機械実習			
専門職業人としての役割と社会的責任を理解した上での、農林業・農山村が有する多面的機能と、その資源を保全する手法の理解	環境保全 農山村振興		農山村田園地域公共学	環境と農林業		農村景域論	環境保全型農業論			展開科目
				農村社会論		コミュニティビジネス論	森林マネジメント論			
・修得した専門知識と技術を駆使して、課題を探究し、解決に必要な情報を収集・分析・整理する能力 ・分析・整理した結果を表現する論理的な記述力、口頭発表力、コミュニケーション能力							経営実習Ⅰ	経営実習Ⅱ		総合
							経営分析演習Ⅰ	経営分析演習Ⅱ		
							プロジェクト研究Ⅰ	プロジェクト研究Ⅱ		

カリキュラム・ポリシー	基礎科目	幅広い知識や多面的な物事の見方などを身につけるため、人文科学や社会科学、コミュニケーションスキルなどを学ぶ科目を配当
	職業専門科目	農林業生産及び経営に必要な知識・技術と先端技術への対応力を身につけるため、農林業基礎、生産理論、経営管理などを学ぶ科目を配当するとともに、実習・演習科目を重点的に配当
	展開科目	農林業や農山村が有する多面的機能と、その資源を保全する手法を理解するため、環境保全や農山村振興などについて学ぶ科目を配当
	総合科目	農林業経営における課題を探究し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、その成果をとりまとめる科目を配当

アドミッション・ポリシー	(1) 農林業生産技術や経営などを学ぶ上で必要な基礎学力と知識を身に付けている人
	(2) 課題解決や新たな価値の創造に取り組むために、従来の常識にとらわれない柔軟な思考力を備えている人
	(3) 農林業に高い関心を持ち、農林業経営の中核となり、農林業の発展に貢献する意欲がある人
	(4) 自然と共生し地域の人々と協働しながら、持続的な社会の発展に自らの能力を活かしていく意欲がある人

農林大学校(養成部・研究部) カリキュラム・マップ

		養成部1年	養成部2年	研究部1年	研究部2年
区分				区分	
教養科目		教養基礎、体育 基礎英語、英会話 経済学、心理学 社会学、生物学			
全学科共通科目		農林業経営、農林業政策 ○作物、○農林業汎論 マーケティング論、特別講義 情報処理Ⅰ・Ⅱ、 情報処理演習 簿記Ⅰ・Ⅱ 農業気象、環境科学 国際関係論、経営分析・設計 農畜産物加工、国際政治論 フワデザイン、造園		農業経営学 マネージメント演習 企業法人研修 マーケティング論 開発商品事例研究 農畜産物加工論 商品化実践実習Ⅰ 流通研究 農業機械実習 ◎インターシップⅠ	
専門科目	園芸学科	野菜コース 植物生理 農薬概論 農業機械基礎	○野菜概論Ⅰ・Ⅱ ○園芸施設と経営 園芸病害虫と土壌飼料 農業経営研究講座 園芸流通	野菜栽培と育種 ○各種特論 花き栽培と育種 ○各種特論	農業会計学 経営特別講座 就農演習 商品化実践演習Ⅱ Web活用研究 Web実践実習 ◎インターシップⅡ
	茶業学科	○生物工学Ⅰ・Ⅱ ○植物防疫Ⅰ・Ⅱ ○土壌肥料Ⅰ・Ⅱ ○営農ゼミ	○茶栽培Ⅰ・Ⅱ ○茶加工Ⅰ・Ⅱ ○手もみ技術Ⅰ	○茶樹育種、○茶樹栽培Ⅰ・Ⅱ ○茶製造、○茶業土壌肥料 ○茶樹病害虫、手もみ技術Ⅱ ○各種茶、茶業経営、 茶業流通、各種特論	農学研究 植物生理学 土壌肥料学 植物病理学 応用昆虫学
	果樹学科		果樹栽培基礎Ⅰ・Ⅱ 果樹栽培実習Ⅰ・Ⅱ	○果樹育種、○果樹栽培 ○果樹土壌肥料、○果樹病害虫 ○果樹施設環境生理、 果樹経営、果樹経営分析、 果樹流通加工、各種特論	地域活性化論、 地域活性化プロジェクト プロジェクトゼミⅠ プロジェクト実習Ⅰ プロジェクト演習Ⅰ
	畜産学科	大家畜コース 畜産概論 畜産法規 ○家畜生理解剖 畜産加工論 飼料総論 畜産環境論 ○家畜育種繁殖Ⅰ・Ⅱ ○家畜衛生 ○畜産堆肥利用論 ○家畜飼養Ⅰ・Ⅱ	畜産経営 ○乳牛飼養管理、○肉牛飼養管理 家畜管理実習、○繁殖 ○環境保全、○飼料生産調整 流通加工、○各種特論	中小家畜経営、中小家畜施設 飼養管理、○繁殖育種 ○衛生疾病、栄養生理 ○環境保全、○流通加工 中小家畜飼養、○各種特論	農林事務所学習 プロジェクトゼミⅡ プロジェクト実習Ⅱ プロジェクト演習Ⅱ
	林業学科	○森林・林業基礎 ○木材利用Ⅰ・Ⅱ ○測樹 林業経営Ⅰ ○育林Ⅰ・Ⅱ ○特用林産Ⅰ・Ⅱ ○林業機械 ○伐木集運材Ⅰ ○森林測量、○森林情報	○森林保護、○環境保全 ○木材利用Ⅲ・Ⅳ 林業経営Ⅱ ○育林Ⅲ・Ⅳ ○特用林産Ⅲ ○伐木集運材Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ ○林業特論Ⅰ・Ⅱ	○大型機械実習 ◎先進経営研修 卒業論文	

凡例
○…「生産理論を学ぶ講義」と「生産技術を身につける実習」が一体となった科目
◎…臨地実務実習

生産科学科 カリキュラム・マップ

卒業単位:68単位

【養成する人材像】
 ○農林業生産現場のリーダーであるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会を支える農林業者として、それらを守り育てていくことができる人材

- 必修
- 選択必修
- ◎ コース必修
- 実験・実習

科目	カリキュラム・ポリシー	教育課程									
		1年				2年					
		春期	夏期	秋期	冬期	春期	夏期	秋期	冬期	春期	冬期
基礎 (10単位)	(1) 社会人に求められる実用的な知識やコミュニケーション・スキルなどを学ぶ教育課程を編成する。	● 静岡学 2 ● 情報処理演習 2 ● 分子生物学 2 ● コミュニケーション論 1 ○ 英語基礎 1 ○ 英語応用 1 ● 保健体育 2 (自由)簿記基礎 1 (自由)簿記応用 1									
		■ 農林業基礎(7単位) ● 農学概論 2 ● 農林業のための科学 1 農林業史 2 県内農林業事情 2 海外農林業事情 1 農林業政策 2 県外農林業事情 1 営農と農業関連法 2 野生鳥獣管理・利用論 2 ※ここから2単位以上									
		■ 生産理論(14単位) <共通> ○ 植物生理生態学 2 ○ 樹木・組織学 2 ○ 畜産概論 2 ※ここから2単位以上 <栽培コース> ◎ 肥料・植物栄養学 2 ◎ 先端栽培技術 2 ◎ 環境保全型農業論 2 ◎ 植物保護 2 ◎ 施設園芸 2 作物栽培 2 野菜栽培 2 土壌学 2 花き栽培 2 植物遺伝育種学概論 2 茶栽培 2 果樹栽培 2 ※ここから2単位以上 <林業コース> ◎ 森林計画学 2 ◎ 森林土木論(治山・林道) 2 ◎ 木材生産システム 2 ◎ 森林マネジメント 2 ◎ 造林学 2 ◎ 森林生態学 2 <畜産コース> ◎ 飼料総論 2 ◎ 家畜育種繁殖 2 人工授精論 2 ◎ 畜産環境・肥肥利用論 2 ◎ 家畜飼養 2 ◎ 家畜衛生学 2 ◎ 家畜生理解剖 2 ◎ 畜産法規 2									
		■ 生産技術(25単位) <共通> ● 総合実習 2 <栽培コース> ◎ 圃場実習 I (野菜) 4 ◎ 圃場実習 II (野菜) 6 ● 企業実習 10 ● 大型機械実習 2 ● GAP演習 1 ※野菜①と野菜②に分かれる。 ◎ 圃場実習 I (花き) 4 ◎ 圃場実習 II (花き) 6 ● 企業実習※再掲 10 ● GAP演習※再掲 1 ● 大型機械実習※再掲 2 ◎ 圃場実習 I (茶) 4 ◎ 圃場実習 II (茶) 6 ● 企業実習※再掲 10 ● GAP演習※再掲 1 ● 大型機械実習※再掲 2 ◎ 圃場実習 I (果樹) 4 ◎ 圃場実習 II (果樹) 6 ● 企業実習※再掲 10 ● GAP演習※再掲 1 ● 大型機械実習※再掲 2 <林業コース> ◎ 演習林実習 I 4 ◎ 演習林実習 II 6 ● 企業実習※再掲 10 ● 大型機械実習※再掲 2 ● GAP演習※再掲 1 <畜産コース> ◎ 圃場実習 I (畜産) 4 圃場実習 II (大家畜) 6 ● 企業実習※再掲 10 ● GAP演習※再掲 1 圃場実習 II (中小家畜) 6 ● 大型機械実習※再掲 2									
職業専門 (46単位)	(2) 農林業に関する基礎的な知識及び農林業生産に関する専門的な理論や技術を学ぶとともに、農林業生産に活用される先端技術を学ぶ教育課程を編成する。										
展開 (10単位)	(4) 農山村の伝統・文化の継承や地域社会及び生産物の加工・流通・販売などについて学ぶとともに、それらの知識を活用して生産物の付加価値向上を図るための手法を学ぶ教育課程を編成する。	■ 農山村の伝統・文化及び地域社会(2単位) <共通> ● 農山村田園地域公共学 2 ■ 加工・流通・販売等(8単位) <栽培コース> 食品科学 2 農と食の健康論 2 ● マーケティング・販売演習 2 ● マーケティング・販売演習※再掲 2 ● マーケティング・販売演習※再掲 2 ※いずれか1回 食品加工演習 2 食品加工演習※再掲 2 アグリフードシステム論 2 流通加工論 2 ◎ 農業経営 2 <林業コース> ◎ 木材加工演習 2 ● マーケティング・販売演習※再掲 2 ◎ 木材利用・流通論 2 ◎ 林業経営 2 <畜産コース> 食品科学※再掲 2 農と食の健康論※再掲 2 ● マーケティング・販売演習※再掲 2 食品加工演習※再掲 2 食品加工演習※再掲 2 畜産経営演習(大家畜) 2 アグリフードシステム論※再掲 2 流通加工論※再掲 2 畜産経営演習(中小家畜) 2 ◎ 畜産経営 2 ※ここから2単位									
総合 (2単位)	(5) 農林業生産現場における課題の解決に向けた研究の手法などを学ぶ教育課程を編成する。	● プロジェクト研究 2									

ディプロマ・ポリシー

(1) 社会人に求められる知識やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性を理解し多面的に物事を考える素養を有している。
 (2) 農林業生産現場の生産性向上等を図るための農林業生産に関する専門的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術を生産現場へ導入する能力を有している。
 (3) 農山村の地域社会を支える農林業者として、農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくための農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などに関する知識を有している。
 (4) 農山村の地域資源や加工・流通・販売などに関する知識を活用し、生産物の付加価値向上を図るための手法を理解している。
 (5) 修得した専門知識と技術を駆使して農林業生産現場における課題を探索し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、分析・整理した結果を表現できる能力を有している。

食料・農業・農村基本法の骨子

第1 基本理念

1. 食料の安定供給の確保

- 1 食料は、人間の生命の維持に欠くことができないものであり、かつ、健康で充実した生活の基礎として重要なものであることにかんがみ、将来にわたって、良質な食料が合理的な価格で安定的に供給されなければならない。#
- 2 国民に対する食料の安定的な供給については、世界の食料の需給及び貿易が不安定な要素を有していることにかんがみ、国内の農業生産の増大を図ることを基本とし、これと輸入及び備蓄とを適切に組み合わせる行われなければならない。#
- 3 食料の供給は、農業の生産性の向上を促進しつつ、農業と食品産業の健全な発展を総合的に図ることを通じ、高度化し、かつ、多様化する国民の需要に即して行われなければならない。#
- 4 国民が最低限度必要とする食料は、凶作、輸入の途絶等の不測の要因により国内における需給が相当の期間著しくひっ迫し、又はひっ迫するおそれがある場合においても、国民生活の安定及び国民経済の円滑な運営に著しい支障を生じないよう、供給の確保が図られなければならない。#

#

2. 多面的機能の発揮

国土の保全、水源のかん養、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承等農村で農業生産活動が行われることにより生ずる食料その他の農産物の供給の機能以外の多面にわたる機能(以下「多面的機能」という。)については、国民生活及び国民経済の安定に果たす役割にかんがみ、将来にわたって、適切かつ十分に発揮されなければならない。#

#

3. 農業の持続的な発展

農業については、その有する食料その他の農産物の供給の機能及び多面的機能の重要性にかんがみ、必要な農地、農業用水その他の農業資源及び農業の担い手が確保され、地域の特性に応じてこれらが効率的に組み合わせられた望ましい農業構造が確立されるとともに、農業の自然循環機能(農業生産活動が自然界における生物を介在する物質の循環に依存し、かつ、これを促進する機能をいう。以下同じ。)が維持増進されることにより、その持続的な発展が図られなければならない。

#

4. 農村の振興

農村については、農業者を含めた地域住民の生活の場で農業が営まれていることにより、農業の持続的な発展の基盤たる役割を果たしていることにかんがみ、農業の有する食料その他の農産物の供給の機能及び多面的機能が適切かつ十分に発揮されるよう、農業の生産条件の整備及び生活環境の整備その他の福祉の向上により、その振興が図られなければならない。#

“ふじのくに”の農山村づくり
(静岡県農業農村整備みらいプラン 2018-2021)

静岡県経済産業部

<目 次>

はじめに

1 策定の趣旨	1
2 役割	2
3 構成と計画期間	2

I 基本方針

1 理念	3
2 取組の視点	4

II 基本計画

1 現状と課題	7
2 政策方針	11
3 施策方針	21
4 計画推進にあたっての留意事項	25

III プラン実現に向けた連携

1 農村振興技術者の役割	27
2 関係者への期待	29

IV 指標	31
-------	----

(参考資料)	36
--------	----

はじめに

1 策定の趣旨

静岡県では、平成 25 年度に策定した「“ふじのくに”の農山村づくり（静岡県農山村整備みらいプラン 2014-2017）」に基づき、農業用水の安定供給や生産性向上による産地競争力の強化、地域資源の保全継承を担うコミュニティの形成と活性化を重点取組に掲げ、地域の様々な活動と連携し、農山村づくりに取り組んできた。

このプランでは、農業農村整備事業の長期的な理念を「美しく品格のある農山村の創造」と定め、平成 25 年度までの最初の 4 年間は「基礎づくり」、平成 29 年度までの 4 年間は「実践的モデルづくり」の視点のもと取組を展開してきた。

これまで、産地戦略の実践として基盤整備を実施してきた地区では、生産性が飛躍的に向上し、意欲的な後継者が育成されるとともに、レタスなどの高収益作物の導入が徐々に拡大してきている。

また、「ふじのくに美しく品格のある邑づくり」では、県下で 122 の地域が「美しく品格のある邑」に登録されるとともに、農山村の景観や地域の歴史・文化等の地域資源を活用した活動を行う NPO 等の主体が設立されるなど、農山村に新たな活力が生まれており、この 8 年間の取組は着実に成果をあげている。

しかしながら、本格的な人口減少社会を迎える中、農業者の高齢化や担い手の不足、TPP や EPA 等のグローバル化の進展や国内産地間競争の激化等により、本県の農山村は総体として弱体化傾向にある。

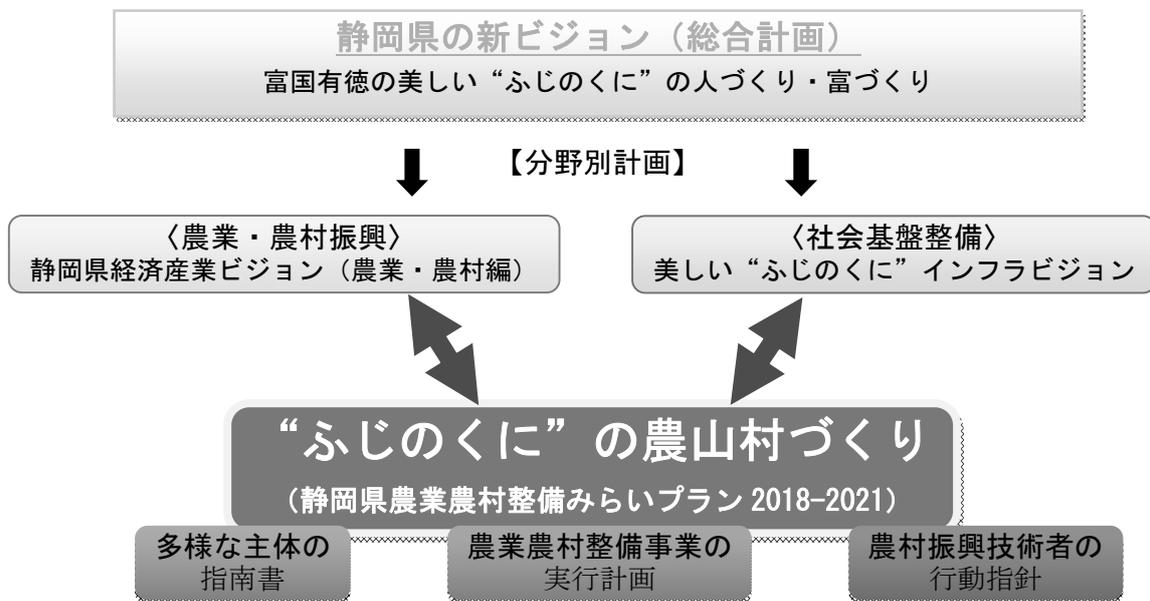
このような状況において、本県の農山村が有する「多彩で高品質な農産物の安定供給」と「多面的機能の発揮」という重要な役割を将来に渡って持続的に維持・発展させていくために、農業の競争力強化と農山村社会の再生・活性化に向けた取組を、地域特性に応じて、一体的に進めていかなければならない。

このため、美しく品格のある農山村の創造の実現に向けた「発展的取組の拡大」を行うプランとして、この「“ふじのくに”の農山村づくり（静岡県農業農村整備みらいプラン 2018-2021）」を策定する。

2 役割

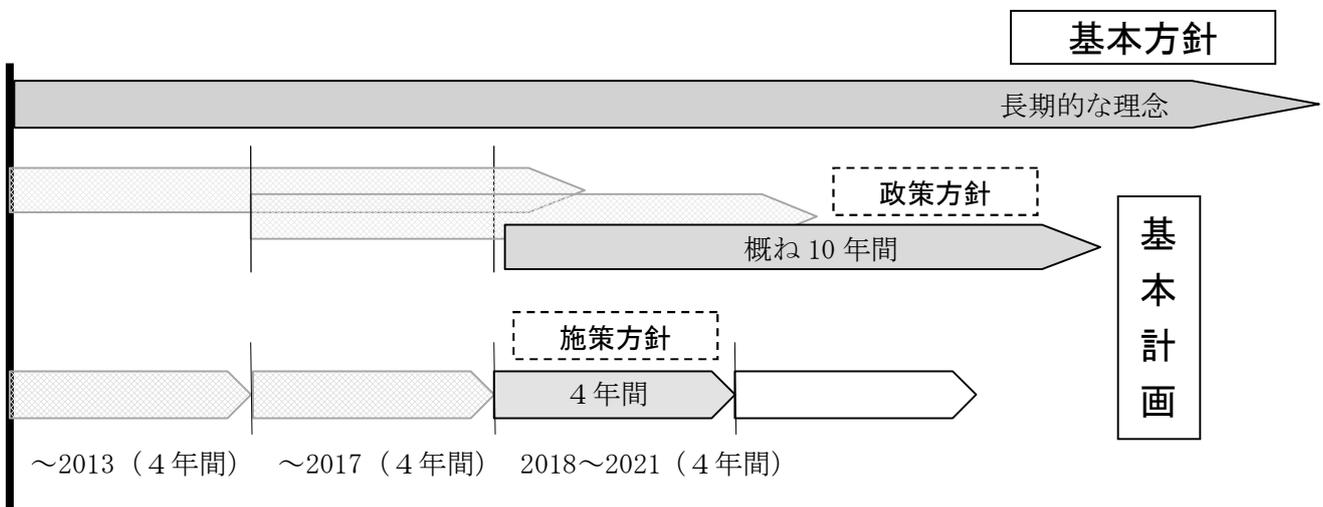
このプランは、上位計画の「静岡県の新ビジョン 富国有徳の美しい“ふじのくに”の人づくり・富づくり」、その分野別計画である「静岡県経済産業ビジョン（農業・農村編）」並びに「美しい“ふじのくに”インフラビジョン」の実行計画として、本県の農業農村整備事業の長期的な理念と取組の視点、政策の方向性と主な取組を明らかにするものである。

また、農業農村整備事業に関わるあらゆる立場の人々、団体、機関等が、共通認識のもとで本県の農山村のあるべき姿を描き、その具現化に向けて、協働して取り組むための指南書であるとともに、農業土木技術者が農村振興技術者へと発展し実践すべき行動指針としての役割を担うものである。



3 構成と計画期間

本プランは、本県の農業農村整備事業の「基本方針」を示すとともに、概ね10年間の政策方針と、その達成に向けた平成30年度（2018年度）から4年間の具体的な施策方針を示した「基本計画」により構成している。



I 基本方針

1 理念

『美しく品格のある農山村の創造』

かつて、幕末から明治に日本を訪れた多くの外国人は、まるで庭園のように手入れされた農山村の美に深く感嘆し、「絵のように美しい」と形容した。その美しさは、自然と人間の営みが長い年月をかけて造り上げた農山村の姿だけではなく、当時の人々の考え方、暮らしぶりといった日本社会そのものに対する感動からおこったものであった。

「静岡県の新ビジョン 富国有徳の美しい“ふじのくに”の人づくり・富づくり（静岡県総合計画）」を目指す本県の農山村は、当時の農山村を理想像として、景観の美しさにとどまらず、その源となる農業に勤しむ生産者と、地域の資源を保全し次世代へ継承しようとする様々な人々の共同体意識に至る外形と内面の「農山村の美」を実現していくことが重要である。

人に人格があるように村にも村格があり、それは、鎮守の森や菩提寺、旧家の名主・豪農、土地改良の水利権といわれた。村格の基準は、当時と大きく変化していると思われるが、人格が、「独立した個人としての、その人の人間性」であれば、村格は、「独立したひとつの共同体としての地域性」、「その地域固有の、共同体としてのあり方」であるともいえる。従って、「人格者」と言われる人がいるように、「村格者」と言われるような農山村もあるべきである。

本県の農山村がその姿を富士山のように美しく高め、世界中から憧れられ、そこを訪れてみたい、その産物を手にしたい、そこで暮らしてみたいと思われるような存在となるためには、共同体としての農山村の社会（コミュニティ）が、地域のあり方を自ら考え、主体的・意欲的に地域の「場の力」を最大限に活用し、その実現に取り組むといった力強い自律性に裏付けられた品格が必要である。

こうした考えに基づき、農業農村整備事業に関わるあらゆる人々が、農山村のあるべき姿を見定め、的確に対応していくための道標となる理念を「美しく品格のある農山村の創造」とする。

2 取組の視点

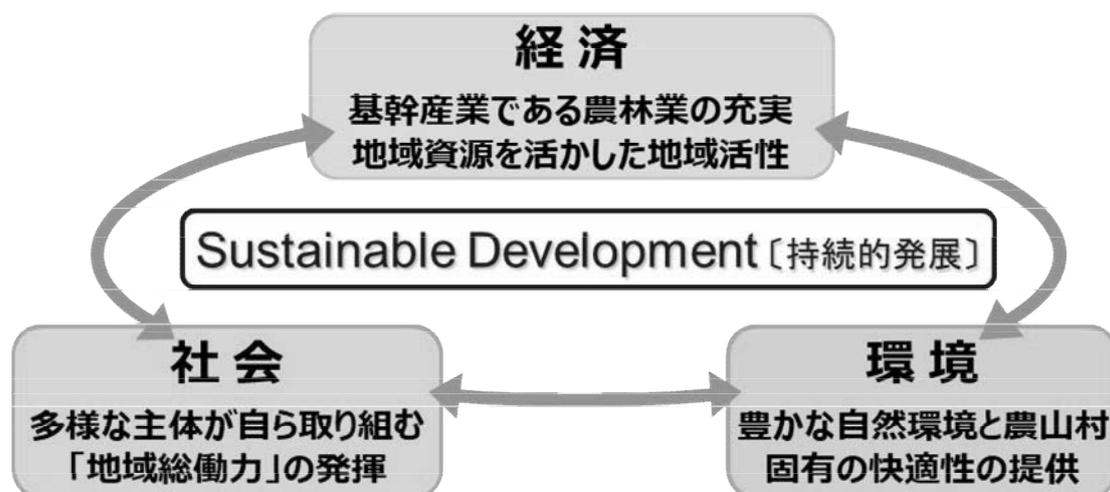
～ 環境・経済・社会の調和による持続可能な農山村づくり ～

農山村では、人と自然の共生が生み出す二次的な環境を基礎として、農業生産活動、人々の生活、地域の歴史、文化が調和した独自の景観が形成されており、こうした農山村の佇まいは、農業が持続的に行われるとともに、農山村の活力が維持、向上されることによって保全されている。

この「農山村らしさ」は、単に視覚的な自然の姿や農業生産の場としての景観だけではなく、長い歴史の中で、それらを保全し継承してきた農山村の社会（コミュニティ）が根幹となっている。

コミュニティなくして、水田や水路、里山などの二次的な環境を継承していくことは難しく、また、担い手への農地集積や基盤整備など、個の生産活動を発展させることも難しい。同時に、農泊やGI（地理的表示）、産地での直売など、農産物や地域資源を活用した経済活動を行う上でも、地域の環境や景観が重要な要素になる。

このことから、美しく品格のある農山村の創造に向け、農山村の根幹であり、多様な主体の協働力により構築された「社会（コミュニティ）」、人と自然との共生関係によって創造・継承されてきた特色のある農山村の「環境」、地域の基幹産業として成長を続ける農山村の「経済」が、地域特性に応じてバランスよく調和することで持続性が確保¹されるよう、農業・農村施策を総合的に展開していく。



¹ 「美しく品格のある農山村」について、前プランでは「3つの要素それぞれの持続性が確保された姿」としていたが、本プランでは、地域特性に応じて、「3つの要素がバランスよく調和することにより持続性が確保された姿」としている。

社 会

農山村の社会（コミュニティ）は、農業の歴史と深く関わり、営農や水管理等の共同作業を通じて形成され、非農家も含めた冠婚葬祭等の様々な集落活動を通じて、その結びつきを強め、安定的なものとしてきた。

しかし、農業従事者の減少や高齢化に加え、都市化・混住化の進行、就業形態の変化、生活様式や価値観が多様化する中、地域内の地縁的な結びつきが希薄化し、農業活動はもとより、中山間地域等においては集落活動を維持していくことも困難になりつつある。

その一方で、都市住民等を含む様々な人々の「田園回帰」志向の高まりにより、農山村への移住や援農ボランティア等の動きが広がってきており、こうした人々が、恵まれた交通インフラを有する本県の優位性を活かし、農山村との多様な関わりを深め、持続可能な農山村づくりに積極的に参画することが求められる。

このため、農山村での集落活動により備わった合意形成力を基本としつつ、地域住民、行政や都市住民、外部人材や企業が主体となって、長期的な視点のもと、持続性に富んだ豊かな暮らしを享受できる地域のあり方を自ら考え、地域の将来構想の実現に取り組む「地域総働力」²を備えたコミュニティを形成していくことが重要である。

また、コミュニティ強化に向けては、これまでの農村資源の保全管理を重視した側面から、伝統文化の継承や教育、福祉の活動など、地縁組織として住民の暮らしに必要な様々な活動を担う農山村の機能複合性の重視へと視野を広げ、豊かな暮らしやライフスタイルを意識した取組を展開することも重要な視点である。



² 農業者や地域住民による「農村協働力」に、都市住民や企業等の地域外の協力を加えた「新たな力」行政と市民のように1対1に表現される協働より先に進んだ形態。組織や立場を問わず、地域に関係する全員が参画し、総力を挙げて地域づくりに取り組むこと。

環境

農山村の環境は、生物の多様性や眺望の良さ等によって、ゆとりと潤い、やすらぎに満ちた農山村固有のアメニティ（快適性）を私たちに提供している。

アメニティの源泉となっている農山村の多様な地域資源は、そこに住む人や訪れる人が、幸せや安らぎを感じる優れた環境を保持している。

農山村が持つアメニティは、郷愁をさそう原風景といえる環境を保全あるいは復元することのみによって実現されるものではない。恵まれた交通インフラがもたらす新たな価値を活用し、本県らしい「豊かな自然と都市的な利便性を併せて享受できる現代的な意義を持った農山村のアメニティ」を創出することが重要である

加えて、長い歴史の中で先人たちから、自然に対する畏敬の念や災害への脅威とともに受け継がれてきた、大地震や豪雨に対する防災意識のもと、災害への対策が適切に実施されていることも重要な視点である。



経済

農山村の基幹産業は、生産者の占める割合が小さくとも、その役割、土地利用の規模等からみても農林業である。また、その生産活動により、特徴的で季節を感じさせる景観等を生み出している。

本県の農業は、低コスト化や高付加価値化によって安定的かつ持続的に展開されるとともに、「食材の王国」である本県の多彩で高品質な農産物を生み出している。併せて、恵まれた交通インフラ、富士山に代表される景観等の地域資源を活かした農商工連携等によって地域経済をもけん引していくことが重要である。

また、中山間地域等において、農業や農地・農業用施設の有する多面的機能を活用し、時代の流れをつかんだ、農泊やジビエ、農福連携等、新たな視点を加えたビジネスを誘発することも重要な視点である。



「農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境」について学ぶ科目の概要

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目	農林業基礎	農学概論	持続的な社会の構築のため、農学には新たな展開が必要となっている。本科目では、日本の農林業の現状を把握し、環境問題、エネルギー問題、担い手問題など複雑ににからみあう現実の課題を解決し、持続的な社会を構築するために現代の農学は何ができるか、どう拡大・進化を続けているかを考察する。我が国農林業の課題、作物栽培の現状と課題については、食生活の多様化に対応した作物供給、農産物輸出、経営の大規模化・農地集積等によって生じる課題について学習を行う。	オムニバス方式
		環境と農林業	農業と林業は、それぞれの基盤である農地、森林の間で相互に関係を持ちながら、水、大気、物質の循環に貢献しつつ、多面的機能を発揮している。その一方、戦後の日本農林業の発展過程において農薬による化学物質汚染や肥料の過剰利用による富栄養化などの様々な環境問題を引き起こしてきた。本科目では、農林業が環境保全へ果たしている役割や森林のもつ景観形成機能を学ぶとともに、農林業生産が引き起こす環境問題とその対策を考える。	オムニバス方式
		技術者倫理	人類は、高度経済成長により飛躍的に物的豊かさを獲得してきた。農林業では、規模拡大や単作化、機械化、化学肥料・農薬の多用が進んでおり、農林業は環境問題の一端の責任を負っている。また、食の安全・安全も課題である。このような問題群の中で、農林業関係者は農林業の発展に関し大きな社会的責任を負っており、倫理的な問題が絡んでいくことが認識されつつある。農林業の経済的責任や法律遵守の倫理的責任だけでなく、地球市民として天然資源の節約や温室効果ガスの発生抑制、福祉社会への貢献等々、公共益の配慮を経営プロセスに組み込み、その実践について顧客等に対して説明責任を果たすことが求められる。本科目では、農林業関係者が、今後どのように食や環境の問題について対応するかを考える。	オムニバス方式
	生産理論（栽培）	栽培学	栽培学は、栽培の原理、理論を学ぶ科目であり、栽培を学ぶ基礎となる。本科目では、作物の分類や作物の形態とその機能、生産に係わる温度や光、水、空気、土壌などの環境条件や、耕起、施肥、水管理、病害虫や雑草の防除などの一連の栽培管理など、実際に栽培する際に必要となる基礎知識を体系的に学ぶことを目標とする。また、エネルギーを多投入してきた近代農業の問題点を明らかにし、低投入持続的農業、環境保全型農業技術の重要性を理解する。	
		作物学	農作物は、大きく食用作物、飼料・緑肥作物、工芸作物に分けることができる。このうち、水稻、麦類、トウモロコシ、豆類、イモ類などの食用作物は、エネルギー、蛋白、油脂源として人間の生存や活動に不可欠な主食となる作物である。また、静岡県の主要産品の茶は、工芸・嗜好作物として私たちの生活に潤いを与え豊かなものとしている。本科目では、我が国で最も重要な普通作物である水稻について、起源と分布、品種、形態と生育、生産環境と生産の阻害要因、栽培管理技術について体系的に学習する。また、麦類、トウモロコシ、大豆、茶については、種類、用途、栽培管理技術などについて基本的情報と、環境負荷の軽減、土地・養分等の資源の持続的利用のための作付体系に関する知識の習得を行う。さらに、精密農業は作物の生理・生態的基礎的知見や位置情報に基づく情報集約型の新たな栽培管理法である。そこで、作物の生育ステージ、バイオマス量、ストレス反応を的確に把握するための、指標・センサー・プラットフォーム、データ処理法、情報の活用が見込まれる農作業や適用場面、精密農業向け機械装備、等について学習を進めるとともに、精密農業の実践例をもとに今後の展開について議論を行う。	
		園芸学	静岡県は、イチゴやトマト、レタスなどの野菜、ガーベラやバラなどの花き、ミカンなどの果樹など園芸作物の栽培が盛んな県であり、これらは本県の主要産品となっている。本科目では、園芸の起源と歴史、園芸作物の成長と形態、養分の吸収・光合成と転流・利用、環境制御、繁殖と改良に加え、園芸作物がもつ癒しの機能など、園芸作物の栽培ならびに生産物の取扱いの基礎となる園芸学全般について学ぶ。また、園芸作物は化石燃料を多く使用するため、環境に配慮した栽培についても考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 生産理論(栽培)	植物病理学	植物の病害は、様々な微生物によって引き起こされる。日本は元々高温・多湿条件が続きやすい気候であることから、病害虫の発生やそれらによる被害が大きいのに加え、農産物に高品質を求める傾向が強いことから病害虫防除無しでの栽培が非常に困難な状態にある。さらに、現在のように国際的な物流や人の行き来が盛んになると、その移動にもなって植物の病原体が移動し、以前には見られなかった様な大規模な被害をもたらすことがある。これらの被害を防ぐためには、病原体の特徴と防除方法の知識は不可欠である。本科目では、主な病原体である糸状菌・細菌病・ファイトプラズマ病・ウイルス病・ウイルス病の特性、病気の伝染経路や診断方法等について学ぶ。なお、現在は、単に防除効果があるだけでは受け入れられない社会情勢になっており、環境にも十分に配慮した防除方法が求められている。このことから、IPMの実践や化学農薬以外の防除方法についても積極的に紹介する。	
	応用昆虫学	人間社会とのかかわり合いながら生活している昆虫のなかには益虫もいれば害虫もあり、前者は植物の受粉や害虫の天敵としての生物的防除など有用資材として使われ、後者は食糧増産や保健衛生の立場から防除の対象とされてきた。本科目では、昆虫の形態や生理生態などについて学び、害虫の防除手法について化学的防除、生物的防除、物理的防除など様々な手法を学び、それらを要素技術とする環境に配慮したIPM(総合的有害動物管理)について考える。	
	肥料・植物栄養学	植物の生産現場では、植物の成長に対する肥料の効果の知識だけでなく、たとえば、栄養不良土壌に生育する植物の栄養状態を改善して、生産を向上させるための知識も必要である。本科目では、高等植物を対象とし、高等植物の特性及び植物生産の代謝との関連、植物が成長するために必要な養分の機能、その養分の吸収・移動の機構、植物の栄養特性、肥料の種類と特性について学ぶ。また、近年、肥料と環境の問題が取り上げられることが多いため、環境負荷の少ない施肥方法について考える。	
	野菜園芸学	野菜園芸の発展に伴い主要野菜の周年供給が達成され、また様々な技術開発により高品質な野菜が安定的に生産されている。本科目では、野菜栽培の基本的知識を得ることを目的とし、総論として野菜園芸に共通する生理・生態、野菜育種の現状、栽培技術と作型栽培体系から鮮度保持や流通、各論として果菜類(ナス科植物、ウリ科植物、バラ科植物)、葉菜類、茎菜類、花菜類、鱗茎類、根菜類などの特性と栽培について学ぶ。また、野菜園芸において肥料や燃料など多投入されている現状を踏まえ、環境に配慮した栽培方法について考える。	
	果樹園芸学	果樹栽培の対象とする果実は水分や栄養分の摂取と嗜好品として利用されてきたが、近年は健康増進と疾病予防としての機能が注目されるようになっていく。果樹は他の作物とは異なってほとんどが樹木作物(永年作物)である。そのため、1年生作物とは異なる生理・生態的な特性を有することも多い。特に、果樹は環境条件への依存が高く、リンゴやミカン等、各果樹に適した環境下で栽培されるため、近年の気象変動は果樹栽培に大きな影響を与える。また、一口に果樹と言っても、その果実は子房壁が肥大したものから、花床が肥大して果実となったものまで様々である。本科目では、果樹栽培の基本的知識を得ることを目的とし、果樹の種類・品種の選択方法、環境条件からみた適地の選定、苗木の繁殖・育成、植栽、栽培管理、生理・生態的特徴、収穫、さらに流通・貯蔵まで果実が消費者にとどくまでの内容について、環境に配慮した果樹栽培という視点で体系的に学ぶ。	
	花き園芸学	近年、花きへの関心が日常生活に浸透し、花き産業や花き文化の発展と振興が期待されている。静岡県は、バラやガーベラなどの花き生産が盛んであり、県の主要産品となっている。花き園芸学は、観賞植物の生産および栽培に関する学問であるが、本科目では、花き栽培の基本的知識をえるため、花きの種類と分類、花きの形態と構造、育種、繁殖、開花調整に加え、流通と販売、花き輸入の現状などについて学ぶ。また、施設で資源を多投入して栽培を行っている現状を踏まえ、環境に配慮した栽培について考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目	生産理論(栽培)	土壌学	土壌は農林業に利用されるだけでなく、地球環境保全にも欠かせないものである。本科目では、土壌の概念や、土壌の三層構造や化学的組成などの土壌の構成、土壌鉱物、陽イオンと陰イオンの交換と固定、土壌生物、土壌有機物、土壌の酸化・還元に加え、水田や畑、施設、草地、樹園地などの土壌の現状や環境問題など農林業生産に必要な土壌の基礎知識について学ぶ。また、 <u>土壌診断に基づいた土壌改良対策・適切な施肥設計の方法を理解し、環境に配慮した土づくりについて考える。</u>	
		環境保全型農業論	農業生産力は、品種改良・化学肥料・農薬の三大技術革新で、急激に増大する地球人口を支えてきた。しかし、利益追求や不適切な資材適用による農業生産活動が、環境汚染負荷となって生活環境の破壊ばかりか、農業の再生産にも悪影響を及ぼす事態に及びつつある。さらにグローバル化に伴う食品安全性の担保は、その生産過程にも求められる時代にもなっている。そこで、本科目では、農業のもつ多面的機能を学び、海外の環境保全産業としての農業等を範とする環境保全型農業の様々な技術を学び、今後の農業のあり方について考える。	オムニバス方式
	生産理論(林業)	森林計画・政策論	森林は、多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて私たちの暮らしを支える大切な存在であり、森林を保全し、長期的視点に立った計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。本科目では、森林政策の歴史、森林政策の骨格をなす森林関連法、森林計画制度等の基本的事項を学ぶ。さらに、諸外国の森林政策から、持続可能な森林経営に向けた森林認証制度を学ぶとともに、地球環境問題等の各国の共通性、独自性を学ぶとともに、新たな政策課題についても考察する。また、これらの森林計画策定に必要な森林の現況調査、森林管理における地理情報システム(森林GIS)と森林・林業分野のICT利活用、UAVや衛星画像等を用いたリモートセンシング技術等について学ぶ。	オムニバス方式
		造林学	木材供給、水土保全、保健休養、CO2吸収等の森林が私たちにもたらす恩恵である多くの生態系サービスを将来にわたって享受するためには、森林を健全に保全すると共に、その持続的な循環利用(伐採、植栽、育成・保全)を図る必要がある。本科目では、造林学の基礎となる森林づくりの原理・原則、並びに森林づくりのために行われる各種作業(地拵、植栽、下刈、除伐、間伐等)の目的や方法を学ぶ。また、広葉樹林、針広混交林、複層林等、多様な森林づくりの目的とそれに対応した施業技術について学ぶ。さらに森林景観を科学する森林風致学を概説する。	
	樹木・組織学	樹木は地球環境の維持・浄化に重要な役割を果たすと同時に、建築材、紙・家具・用具などの資源として不可欠なものとなっている。また、生物資源である木材は再生産が可能で、使い方を誤らなければ永続的に利用可能となる資源的特質をもっているが、これらの特質は木材の適正な使用があってはじめて有効になるため、木材の科学的性質を理解する必要がある。本科目では、木質科学全般の基礎である木材の組織・構造と、それらと材質との関連について、植物分類学的な科、属、種ごとの相違を理解する。さらに種内や環境によるそれらの変異を理解し、木材の有効利用に向けた林木育種について学ぶ。また、森林で収穫される椎茸等きのこ類、木炭、竹などの非木材林産物の生産・利用について学ぶ。		
	森林土木学	森林土木学は治山・砂防分野と林業土木分野からなる。治山・砂防分野では、森林山地斜面で発生する土砂移動現象(表面侵食、斜面崩壊、地すべり、土石流等)の発生メカニズムとその対策、および森林植生の有する表面侵食防止、表層崩壊防止の機能とその限界、荒廃地の復元技術および森林・植生がもつ環境保全機能と景観形成機能についての知識と最新の技術を学ぶ。林業土木分野では、木材生産システムの集材工程に大きくかかわる林内路網整備に関する知識(林道、森林作業道開設の目的、役割、構造等)、設計手順、現地踏査についての知識と最新の技術を学ぶ。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目	生産理論（林業）	森林は、国土の保全、水源の涵養、生物多様性の保全、地球温暖化防止等の多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて生活を支えている。このため、長期的な視点に立った計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。また、森林認証制度は、公共建築や商業施設での認証材の活用が推進されているため、森林認証の取得はビジネス・チャンスにつながる可能性がある。長期的な視点に立って作成される森林計画制度や森林保護の視点を備えた持続的林业経営を考える。森林認証の制度や取得方法について学び、森林認証を使用したビジネス展開について考える。	
	畜産概論	人間の生活に貢献するべく動物の生命活動を応用する学問的追究が畜産学であり、従来は食料自給を課題とした生産において柱となる遺伝育種、繁殖、飼養などの専門領域での課題解決とそれに必要な技術開発が中心となって進展してきた。これらの領域には国際的な視野で開らなければならない課題も含まれるようになっており、さらには従来の生産効率一辺倒な対応だけでなく、労働者や飼育される動物の労働・生活環境におけるリスクを回避することも求められる。本科目では、畜産業の歴史と近況の情報を学び、家畜生産における課題の内容に応じて整理し、その解決に向けた対策の解説を通じて現状の理解を深める。そのなかでも畜産業の持続的な発展にむけて解決が不可欠である排せつ物の処理について具体的な解説を行い、今後新たに課題となる内容とその対策に対する指針が策定できることを目標とする。	
	畜産環境学	畜産経営では、家畜排せつ物による悪臭や水質汚染の対策が課題となっており、様々な環境をめぐる課題がある。一方で、家畜ふん尿は土壌改良資材や肥料としての利用価値が大きい貴重なバイオマス資源であり、バイオエネルギーとして活用されている事例もある。本科目では、家畜ふん尿など畜産と環境の問題や、バイオマス資源としての家畜ふん尿の利用、適切な家畜ふん尿の処理法、悪臭対策などについて学び、家畜排せつ物の利活用を促進することによる資源の有効活用、畜産業の持続的な発展、環境保全型農業経営のあり方について考える。	
展開科目	農山村田園地域公共学	農林業は地域と密着した産業であり、持続可能な産業となるためには地域社会との連携が不可欠である。この連携を確認する作業は、農林業の公共性を考える絶好の機会となるであろう。また、農林業には、生産以外の様々な多面的な機能がある。本科目では、農山村の歴史や文化、農業・農村の多面的機能、森林の多面的機能と多面的機能の保全の取り組みについて学び、農山村や田園空間に存在する固有の歴史、伝統、文化等について理解を深め、これからの農林業や農山村のあり方を考える能力の育成を目標とする。	
	食文化論	和食がユネスコ無形文化遺産に登録されたように、日本の食文化が世界的に注目されている。本科目では、「『自然を尊ぶ』という日本人の気質に基づいた『食』に関する『習わし』」である和食文化の特徴や、日本の食文化の変遷や現状について学ぶ。また、日本だけでなく、アジアや欧米諸国など世界各国の食文化も取り上げる。さらに、近年、見直しが進んでいる「在来作物」について学び、在来品種を用いた郷土食や今後の新しい活用法について考える。	
	農と食の哲学	現代社会において食料の消費と流通のあり方は大きく変化した。これを視野に入れない農業（食料の生産）には将来的な展望が拓かれないところまで、事態は進んでいる。それは農学という学問分野にとつて、自らの足場が問われることを意味する。それを踏まえて本科目では、「農」と「食」という営みの本質について、両者の関係に注目しながら、対話を通して考え、持続可能なフードシステムとそれを支える農（学）の使命を構想・実現するための哲学的・倫理的な思考と対話の力を培う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
展開科目	農山村の伝統・文化の継承	農村景域論	日本の農村は、水田、畑、集落、雑木林、鎮守の森、用水路、ため池など、人の手が加わった自然が、長い歴史の中で有機的に連携し、多様な生態系や農村景観が形成されてきた。しかし、近年では、都市周辺農村での混住化、中山間地域の過疎化・高齢化など農村を取り巻く環境が大きく変化し、農村の景観も変化してきている。本科目では、人間の生活・生産活動が行われている動的な地域である景域について学び、景域はそこに暮らす人々の生業の歴史文化と関係しながら形成されてきたという視座に立ち、永続性のある、美しい、健全な景域をめざして、景域の秩序・管理・維持・開発の方法について学ぶことを目標とする。	
		在来作物学	在来作物とは、ある地域で世代を越えて受け継がれてきた伝統作物で、かつては日本全国それぞれの地域毎に、その気候風土や食生活と密接に関連した特徴的な作物が栽培されていた。しかしながら品種改良された作物に比べると、形が不揃いで日持ちがよくないため流通には不向きであると同時に生産性や収益性も低いため、栽培者の高齢化、後継者不足が深刻で、在来作物の多くが既に消失もしくは消失の危機に直面している。静岡県はその地理的な特徴から全国屈指の在来作物の種類を誇り、取り分け静岡市葵区や浜松市天竜区などの山間部にその多くが残っている。在来作物は焼き畑のような昔ながらの農法や伝統行事、地域の食文化とともに受け継がれてきた作物であるため「生きた文化財」とも言われ、さらには有機農法や機能性食品として、あるいは品種改良された作物では失われてしまった深い味わいや風味を生み出す遺伝的多様性を残している。地域の知的財産として注目され始めている在来作物の過去、現在について学び未来について考える。	
	農村社会論	現在、日本の農業・農村は、国際化、担い手の高齢化、耕作放棄地の増加、安全で安心な食料の安定供給などさまざまな課題に直面している。農村社会の特徴を生かしながら、今後の持続可能な農業や社会の発展のあり方を考えるためには、生産だけでなく消費を視野に収めることや、生産者としてだけでなく生活者としての地域住民に着目することが求められる。本科目では、都市における生活や地域社会と対比させながら、農山村の生活や地域社会の特徴を明らかにする。		
	農山村の地域社会	農山村デザイン演習	農林業は地域に密着した産業であり、生業の場が生活の場であることが多い。このため、農山村地域を知ることが重要である。本科目では、農山村において地域住民と交流し、その体験を通して地域や地域住民が抱える課題を発見し、地域とともに課題解決策を考える。また、これらの体験を通じ、日本の中山間地域における農林業と生活の諸問題について関心をもち、地区住民と共に問題解決に挑戦するアイデアや方法を考え、戦略を立てる能力を身につけることを目標とする。	
		グリーン・ツーリズム論	グリーン・ツーリズムは農山漁村における自然・文化・農山漁村との触れ合いや人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動と定義されており、ヨーロッパ諸国では市民の余暇活動として定着している。一方、日本では、政府が普及促進に取り組んでいるが、国民に認知されず、定着していない。本科目では、「グリーン・ツーリズムとはなにか」から始め、ヨーロッパ諸国や日本のグリーン・ツーリズムの事例を通じ、グリーン・ツーリズムの課題と今後の展開について考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
展開科目	農山村の地域社会	医福食農連携論	持続可能な健康社会を構築するためには、食や環境と健康のつながり、すなわち「農」と「医」の連携を理解する必要がある。ヒトが健康であるためには、予防医学の理解が重要であり、そのためには環境や食に関する基礎知識が必要不可欠である。また、園芸活動を通じて得られる心身のリハビリテーションや心の癒し効果、コミュニケーション促進、共同作業による社会参加促進などのさまざまな効用を利用して、障害のある方ばかりでなく心身の健康や機能回復、心のゆとりや豊かさなど生活の質の向上を実現しようという「農」と「福」の連携の動きがある。本科目では、「農と医」、「農と福」の連携の現状を学び、その連携の重要性を理解することを目標とする。	オムニバス方式
		コミュニティビジネス論	コミュニティビジネスとは、地域の課題を地域住民が主体的に、ビジネスの手法を用いて解決する取り組みである。その活動分野は、まちづくり、環境、介護・福祉、IT、観光、地域資源活用、農業、就業支援などの幅広い分野に及んでいる。また、地域における創業機会・就業機会の拡大など様々な効果がある。本科目では、コミュニティビジネスの背景、展開過程やその意義等を踏まえつつ、静岡県内外の事例を基にして、地域社会におけるコミュニティの役割やコミュニティビジネスの効果と課題について学ぶ。	